歴史を歩く⑪

町文化財紹介コーナー

「胡摩ケ崎城跡」

▲大崎小学校下から胡摩ヶ崎城跡を見る

胡摩ケ崎城跡

大崎小学校から200メートル程西へ向かった台地の突端部分は、かつて「胡摩ヶ崎城」と言われた山城であった。築城についての記録はないが、救仁郷断二著「大崎町史」では、鎌倉時代の初め頃に肝付一族が築城し、拠点としていたのではないかとしている。

1336年1月28日に大隅国御家人であった重久篤兼が、後醍醐天皇の側近である千種忠顕家の「雑掌＝役人」のいる胡摩ヶ崎城を攻めたという内容のことが「重久篤兼譜」および「重久文書」に記されているが、文献に「胡摩ヶ崎城」に関する時事が著されるのは、これが初めてであろう。

ところで、この事件があった時期は、ちょうど後醍醐天皇を中心とする新田義貞、楠木正成、足利尊氏ら反幕勢力によって、140年余り続いた鎌倉幕府が滅ぼされた時期でもある。しかし、程なく足利尊氏が、新田義貞らに対して反旗を翻すことになる。1336年に、尊氏は討伐軍を敗り、京都に入るものの、天皇方の武将である北畠顕家に敗れ、九州へと落ち延びる。なお、天皇方にいた島津貞久も足利尊氏に就き、九州まで行動を共にしている。

▲志布志市の大慈寺にある楡井頼仲の墓

九州には尊氏を支持する武将が多かったが、肥後の菊池武敏、日向の伊東祐広、大隅の肝付兼重など、尊氏に抵抗する有力武将も数多くいた。

尊氏はこれらの抵抗勢力に対し、大隅地域には、総帥として畠山義顕（のち直顕）を置き、薩摩方面に禰寝清成らの豪族を配置し、島津貞久も帰国させ、肝付兼重包囲網を確立させた。重久篤兼もまた、この包囲網に加わった御家人である。

そして、この年、尊氏が新たに光明天皇をたてたことにより、「南北朝時代」が始まることになった。足利尊氏方を「北朝」、後醍醐天皇方を「南朝」と呼ぶ。

日向、大隅、薩摩各地でも南朝方と北朝方の攻防が展開される。その中、大隅地域で華々しい活躍をした武将がいた。南朝方の楡井頼仲である。

1348年、志布志松尾城主―楡井頼仲の弟である楡井頼重は、胡摩ヶ崎城を拠点にして兵を挙げた。足利尊氏の弟である足利直義は、これを脅威とし、畠山直顕、島津貞久に頼仲の追討を命じる。

1350年に楡井頼仲は肝付兼重と連合を組み、畠山直顕、島津貞久に抵抗するが、翌年、肝付兼重は死去、島津方の禰寝清成によって、頼仲が支配していた高隈城、大姶良城、鷹栖城などを攻められ、大敗し、本拠地である志布志松尾城も落城する。

その翌年の1352年に楡井頼仲は再起して大姶良城を奪回したのを機会に、薩摩地域にいる南朝方の支援を得て、勢いを盛り返す。しかし、1354年に禰寝氏に鹿屋一ノ谷城を落とされ、大姶良城も落城し、頼仲は失踪した。

1357年に畠山直顕は胡摩ヶ崎城に潜伏している楡井兄弟を突き止め、禰寝氏と共に胡摩ヶ崎城を攻撃。この時、弟頼重は戦死し、頼仲は志布志松尾城に逃れた。しかし、追撃に合い、城は陥落。結局、頼仲は大慈寺で自害した。皮肉にも、大慈寺は頼仲が創建した寺であった。

大崎町内には、胡摩ヶ崎城ばかりでなく、分かっているだけでも10程の城跡が存在する。そのうち、横瀬の龍相城、崎園にある野卸城、在郷の天守城、所在は不確定だが、一説には岡別府にあったとされる天ケ城の4つの城は、楡井頼重が拠点にしていた胡摩ヶ崎城を防御するための城であったとも言われている。

郷土を駆け抜けた武将―楡井兄弟。彼らの残した戦跡は、今もなお、大隅半島各地に、その名残をとどめている。

【大崎町埋蔵文化財専門員　内村憲和】

▲胡摩ヶ崎城天守閣があった場所からの景色